

マタイによる福音書第9章9-13節釈義

加藤常昭

5 聖書テキスト

◆マタイを弟子にする

9:イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が取税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。10:イエスとその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。11:ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。12:イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。13:『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

15

9 Καὶ παράγων ὁ Ἰησοῦς ἐκεῖθεν εἶδεν ἄνθρωπον καθήμενον ἐπὶ τὸ τελώνιον, Ματθαῖον λεγόμενον, καὶ λέγει αὐτῷ· ἀκολούθει μοι. καὶ ἀναστὰς ἠκολούθησεν αὐτῷ.

10 καὶ ἐγένετο αὐτοῦ ἀνακειμένου ἐν τῇ οἰκίᾳ, καὶ ἰδοὺ πολλοὶ τελῶναι καὶ ἁμαρτωλοὶ ἐλθόντες συνανέκειντο τῷ Ἰησοῦ καὶ τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ. 11 καὶ ἰδόντες οἱ Φαρισαῖοι ἔλεγον τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ· διὰ τί μετὰ τῶν τελωνῶν καὶ ἁμαρτωλῶν ἐσθίει ὁ διδάσκαλος ὑμῶν; 12 ὁ δὲ ἀκούσας εἶπεν· οὐ χρεῖαν ἔχουσιν οἱ ἰσχύοντες ἰατροῦ ἀλλ’ οἱ κακῶς ἔχοντες. 13 πορευθέντες δὲ μάθετε τί ἐστὶν· ἔλεος θέλω καὶ οὐ θυσίαν· οὐ γὰρ ἤλθον καλέσαι δικαίους ἀλλὰ ἁμαρτωλοὺς.

25 (参照・マルコによる福音書並行記事 第2章13節以下)

13:イエスは、再び湖のほとりに出て行かれた。群衆が皆そばに集まって来たので、イエスは教えられた。14:そして通りがかりに、アルファイの子レビが取税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。15:イエスがレビの家で食事の席に着いておられたときのことである。多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席していた。実に大勢の人がいて、イエスに従っていたのである。16:ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。17:イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

35

翻訳について

①新共同訳の小見出しには疑問がある。後述するように、この段落で主として語られていることを言い表してはいないからである。この小見出しなら9節だけにすべきであろうが、それでも適切ではないと思う。敢えてつけるならば、「主の招き」である。

- ②9節。「通りがかりに」という訳語は意味が取りにくい。主イエスは「途上に」おられるのであり、その途上で、同じ道を、主に従って歩むように、招かれたのである。しかも、最初に「ひとりの人間を見られた」とあり、それがマタイと言うひとであったと補っている。そのニュアンスは日本語に移してもいいのではないか。その点で「見かけ」という訳語も弱い。ひとりのひとが収税所で座って働いているのをご覧になって、「そして呼ばれた」のである。
- ③10節。原文のマタイによる福音書特有の表現である ἐγένετο, ἰδοὺ などが訳されていないため、躍動感が消えている。たとえば、KIV はこうであった。“And it came to pass, as Jesus sat at meat in the house, behold, many publicans and sinners came and sat down with him and his disciples”. である。徴税人や罪人たちが、主の食卓に押しかけてくるという事件が起こったのである。
- ④「行って、学びなさい」という文章を 先行させるほうがよい。

釈 義

- ①マルコによる福音書第2章13節以下、ルカによる福音書第5章27節以下に並行記事がある。原マルコに含まれる前に、既にこのふたつの物語は、ひとつのものとして伝承されたのであろう。その軸になっているのは、13節の主イエスの言葉であり、罪人を招く主イエスのお姿である。主イエスの救いを最も集中的に表現する单元となったのではないか。説教者が、喜ん語った物語のひとつであったのではないかと推測する。
- ②原マルコの記述が、マルコによる福音書に生きているとすれば、マタイは、それをかなり変更、改善している。マルコの煩雑な叙述を省き、物語を、よりいきいきと語っている。
- ③マルコ、ルカ両福音書と違い、ここにマタイの名が記されている。この違いがどうして生じたかは推測するよりほかはない。第10章2節の「十二使徒」の名簿に徴税人であったマタイの名があることからしても、この福音書に使徒マタイが関わっていたことを示唆するであろう。しかし、福音書の叙述が、「ひとりの人間」が主に召されるという、ある意味で、一般的な召命の出来事を記す思いがあつたのではないかと思われる。つまり、われわれにとって、使徒マタイはわれわれにとって大切な存在であると思いながら、同時に、この召命は、更に多くの〈キリスト者〉、つまり〈キリストの弟子〉が経験したことであつたということを語っているのではないか。それが、この簡潔な、一種の慎ましきを持った物語を生んでいるところではないかと思う。主に従った者の動機も何も語られていない。主が、そのひとを見られて、従うように命じられたことと、それにすぐ立ち上がって従つたことである。
- ③9節は、マルコによる福音書第2章13節を省略している。収税の場所は屋外であつたのではないか、という推測があるようである。主イエスがマタイをご覧になつたのは、そのように、誰もが見ているところでの出来事であつた。 ἄνθρωπον καθήμενον (収税所に座っていた人間) という表現は、 ἀναστὰς ἠκολούθησεν αὐτῷ. (立ち上がって、イエスに従つた) と対比させてのことであろうか。マタイを主が見られて、私に従えと言われ、マタイが座っていたのに立ち上がって、イエスに従つたということだけが、きわめて簡潔に語られているのである。
- ④10節の叙述も簡潔である。食事は、誰の家で行われたのかは、よくわからない。伝承は、そのようなことに興味はなかつたのである。重要なのは、イエスが食卓についておられた時に「事件が起こつた」ということである。 ἀνακειμένου ἐν τῇ οἰκίᾳ, この文章は、実際には弟子たちも、既に同席していたであろうが、まるで、イエスが、おひとりで食卓に横たわつておられたよう

にも読めて興味がある。そこに、多数の徴税人、罪人がやってくるという出来事が起こったのである。この出来事に注目することを求めつつ物語る。この物語る姿勢がマタイによる福音書には明確である。彼らは、イエスと同じ食卓につきたくてやって来たのである。ここでは、主イエスが招かれたとは記されていない。しかし、彼らが押し寄せた動機は、イエスに招かれて

5 いることを知ったからであるに違いない。それを、それに応えて徴税人たちが主体的にやって来たと言う。マタイが主イエスに従って来ていることに対応する。

ついでに言えば、徴税人がユダヤ人社会において、特にファリサイ派に代表される人びとにとって、どのような存在であるかは、われわれも良く知るようになっている。しかし、「罪人」というのは、どのような人びとであったのか。必ずしもよく知られていないのではないか。多くの場合、アム・ハー・アレツ（地に住む民）という言葉で説明される。いわゆる下層民、

10 貧しい人びとで、そのためか、律法について無知であり、生活も律法を軽視した人びとのようである。前科のある人びとというのではないようである。

④ファリサイ派の問いは弟子たちに向けられる。しかし、問題にされたのは、弟子たちの先生、イエスの行動である。共同の食事という出来事の真実の主体は主イエスであることは明らかである。ここには、マタイの教会が実際に体験していた戦いを反映しているのかもしれない。

15

ὁ διδάσκαλος ὑμῶν(あなたがたの先生)。これはマタイ特有である。ファリサイ派が、主イエスを律法の教師と見ていると言える。「あなたがたの」というのは、この教師は、あなたがたにいかなる律法理解と実践を教えているのか、という問いを含むものであろう。マタイによる福音書は、山上の説教を特集しているように、マタイ自身が新しい律法の教師としての主イエスに関心を持っていたのであり、この共同の食事も、新しい神の国の律法を生きておられる

20 主イエスと弟子の共同体の姿なのであったのではないか。

⑤「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である」。自明のことを語っているようである。しかし、主は、この言葉で何を語られたのであろうか。この主の言葉を愛して多用したと思われる古代の伝道者は、何を語っていたのであろうか。13節をも併せて考えると、病める者と罪人とは同じ意味なのであろうか。丈夫なひとは正しいひとのことなのであろうか。具体的に言って、徴税人は病んでおり、ファリサイ派は健康なのであろうか。そうであれば、ファリサイ派は主イエスの癒しを必要としないのであろうか。主の癒やし(救い)を必要とするのは病める者だけ、つまり罪人だけなのであろうか。今日の裁判では、心の病が原因の犯罪は、判決が軽くなるようである。罪人と病人とは、神の審きにおいては取り扱いが軽くなるのか。こ

25

30 ここでは、そのようなことはなく、病める者も、神の審きにおいては、罪人して扱われるのか。ここでは、医師を必要とするのは病める者だということを言われる。そう言われることで、主は、ご自身が、その医師であり、医師である私を必要とするのは徴税人であり、ファリサイ派である、あなたがたではないと言っておられるのか。

これらの考察は、釈義の領域から黙想の領域に移ることを求めているのか。

基本的に言って、主の来臨によって、正しいひとと罪人と、その間を峻別するラインが引かれたと思われるところがある。そして、主の救い、癒しは罪人(病める者)に向けられるとする。しかし、それはファリサイ派が既に知っていた区分とは異なるはずである。ファリサイ派の間違ひは、人間を分類したことではなく、分類の仕方が間違っていたことなのであろうか。

主が来られたのは十字架につけられるためであったとする。そうすると、主の十字架は、罪

40 人の癒しであり、ファリサイ派には関係がなかったのか。

- ⑥“πορευθέντες δὲ μάθετε τι ἔστιν ἔλεος θέλω καὶ οὐ θυσίαν”この文章は、マタイの挿入であつて、他の共観福音書にはない。マタイによる福音書第12章7節にも、もう一度引用される。そこでは安息日に関する律法の理解が問われている。ホセア書の引用に先立ち「行って学びなさい」。ここで聖書の言葉を思い起こさせ、それに聴けば、神のご意思を知る。そう言われるのであるが、それを、「行って学べ」という当時のラビ、ファリサイ派の教師の常套句で語られたのである。多くの注解者が指摘する、この事実は、やはり、マタイによる福音書が、主イエスを〈新しいラビ〉、〈新しい律法の教師〉として紹介していると見ることができる。主に呼ばれ、主に従う「弟子」となった者たちも、この新しい律法に生きるのである。
- 5
- ⑦ホセア書第6章6節全文は、こうである。「わたしが喜ぶのは／愛であつていけにえではなく／神を知ることであつて／焼き尽くす献げ物ではない」。原文では愛といけにえの対比は比較級である。マタイの引用ではいけにえではなく、憐れみを、とあれかこれか、の文体となっている。比較級として理解すべきだという意見の注解書も多いように思われる。問題は、「いけにえ」、「焼き尽くす献げ物」が、神殿祭儀に関わるからであり、マタイが、完全な祭儀否定であるとは考えられないということである。しかし、私は、主イエスも弟子たちも、ひいては後代の教会も、神殿、そこにおける祭儀から自由になっていると理解しており、ここでも、神殿祭儀ではなく、「憐れみ」に生きることである、と教えておられる、と思う。
- 10
- ⑧しかし、ここで言う「憐れみ」とは何か。明らかに徴税人、罪人と共同の食事をする動機を指している。新共同訳は、ホセア書そのものでは、「憐れみ」ではなく、「愛」と訳している。しかし、憐れみは、単純に愛とは言えず、ギリシア後のエレオスも、ヘブライ語のヘセドも、相手の弱さ、欠け、痛みに対する同情が、特に強調されて語られていることは確かである。この物語が語る主イエスの言葉と行動が、どこから出てくるかを語っている。墮落している神の民に対する、痛みを抱えた主イエスの愛が語られている。ひいては、やがて十字架に至る主イエスの道が生まれたのも、ここで語られる神のみこころによると考えることができる。そして、それが、主イエスが、旧約聖書が語る律法に対峙するものとして教えられた新しい律法、三条
- 15
- 20
- 25
- ⑨「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。この区分におけるツィールザッツが、ここにある。これを目指して語られた物語である。「招く」とやくされたカレオーという言葉は、ここでは、ここにしか用いられていないが、物語が語られた最初の出来事が、既に主イエスがマタイを招いてくださったことを語るのであり、それに続く食事も主イエスが、多くの、神の国の外にいたと思われていた人びとを、終わりの時の喜びの食卓、神の食卓を先取りするように、ご自身の食事の席に招いてくださったのである。
- 30